特集

シーボルトの日本博物館

昨年七月から千葉、東京、長崎、名古屋を巡回した「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」。シーボルト没後一五〇年を記念したこの展示が、八月一〇日からついにみんぱくにやってくる。当館では開館四〇周年記念特別展として開催するこの展示の魅力を、展示実行委員が紹介する。

「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」によせて

園田直子（民博 人類基礎理論研究部）

展示の概要

江戸時代後期、医師として来日したシーボルトは、日本の文化や自然にかかわる膨大な資料をヨーロッパにもち帰った。シーボルトの収集資料のうち、一度目の来日時のコレクションはライデン国立民族学博物館（オランダ）にあることはよく知られている。「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」では、これまであまり注目されてこなかった、ミュンヘン五大陸博物館（ドイツ）所蔵のシーボルト二度目の来日時のコレクション、および、シーボルトの末裔（まつえい）にあたるフォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家所蔵の関係資料をとおし、シーボルトがヨーロッパで実際におこなった日本展示を一五〇年ぶりによみがえらせる。

本展示は、国立民族学博物館も参加した人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」のうち、「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（一九世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」の研究成果と位置づけられる。同研究は、国立歴史民俗博物館を総括機関（総括責任者：日高薫（ひだかかおり）教授）とし、平成二二年より六年間、国内外の研究機関と協力のもと実施された。

展示の構成

展示は章立てになっており、第一章「日本に魅せられた男、シーボルト」では、シーボルトの生い立ちから、二度にわたる来日の経緯を概説する。第二章は「シーボルトの日本研究」である。シーボルトは長崎郊外の鳴滝（なるたき）に学塾を開き、西洋医学を教える一方、門人や知人の協力のもと、日本の自然や文化に関する資料や情報を収集した。その成果はヨーロッパで出版された『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』などにまとめられている。第三章「シーボルトの日本展示と民族学博物館構想」では、シーボルトの日本展示の沿革を、一八三二年のライデンの自宅でのコレクション公開、一八六三年のアムステルダム産業振興会館、一八六四年のヴュルツブルク（シーボルトの生まれ故郷）のマックス職業学校、一八六六年のミュンヘンの王宮庭園に面した宮殿内北部ギャラリーの順でまとめる。第四章「ようこそシーボルトの日本博物館へ」では、アムステルダムでの展示を、当時の雑誌記事のイラストから再現を試みた。また、ミュンヘンで開催されたシーボルト最後の日本展示を、長男アレクサンダーが作成したコレクション目録をもとに、展示の順序、展示ケースの区切りをできるかぎり尊重しながら復元する。最終の第五章「日本研究者シーボルトの最期」では、再渡来を熱望しながら、ミュンヘンで七〇年の生涯を閉じたシーボルトの最期を扱う。

みんぱくでの展示の工夫

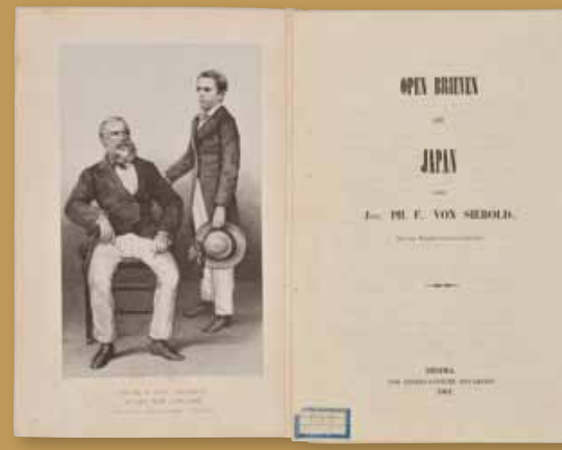
本展示はドイツからの借用資料で構成される。これまで海外からの借用資料の展示においては、欧米の気候条件（基準）をもとに、温度設定は年間とおして一八℃～二二℃に決められることが多かった。近年、保存科学において、環境問題への配慮から空調の費用対効果が問われるようになった。作品を安全に管理することは当然ながら、当該国の気候を考慮したうえで、どのような温度設定が現実的かつ持続可能な選択となるのだろうか。みんぱくでは、展示期間が夏から初秋という、もっとも暑い時期に重なる。そこで、外気温が高いうちは温度設定を二五℃とし、涼しくなるにつれて週に〇・五℃ずつ下げることにした。また、漆工芸など湿度の変動にとくに注意を要する作品においては、展示ケース内をアルミ箔（はく）で養生して密閉性を上げたうえで調湿剤を併用し、内部の湿度変動を抑える工夫をしている。

開館四〇周年記念特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」は、シーボルトが母国に残したコレクションの里帰り展である。シーボルトがどのように日本を展示しようとしていたのか、当時の先端をいくシーボルトの民族学博物館構想の一端にふれていただければと思う。

花鳥図衝立
アムステルダムでの展示を紹介した雑誌記事のイラスト中央に置かれた衝立
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

鳴滝の家屋模型
シーボルトが日本人門人を集めて講義をおこなった家屋の模型
ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

展示ケース内の湿度を調湿剤とアルミ箔養生により一定にたもつ実検の様子（2017年）



フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著『日本からの公開状』
シーボルトとその長男アレクサンダー
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

観察された自然と文化のかたち

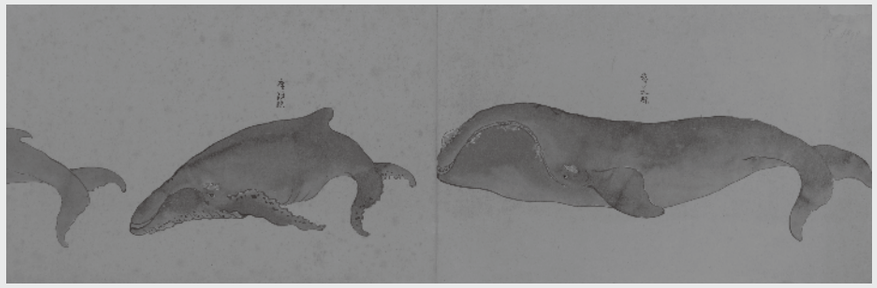
野林厚志
民博 学術資源研究開発センター

江戸の博物学ブーム

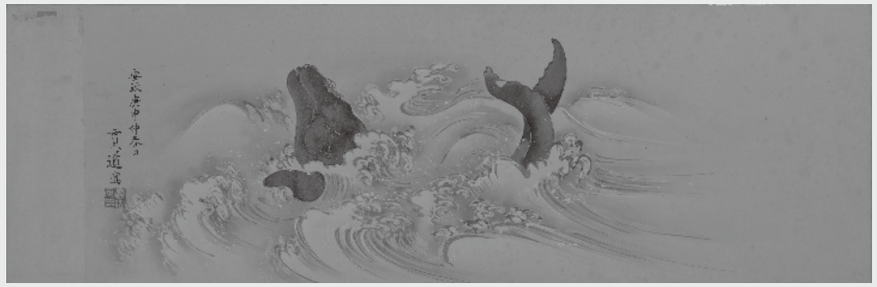
シーボルトは日本の動物学、植物学に大きな影響を与えた。これは、もちろんシーボルト自身に博物学的な素養や関心があったことが大きいが、同時に、シーボルトが滞在したころの日本が、少なからぬ人びとが博物学に興味をもっていた時代であったという時の利を得ていた。

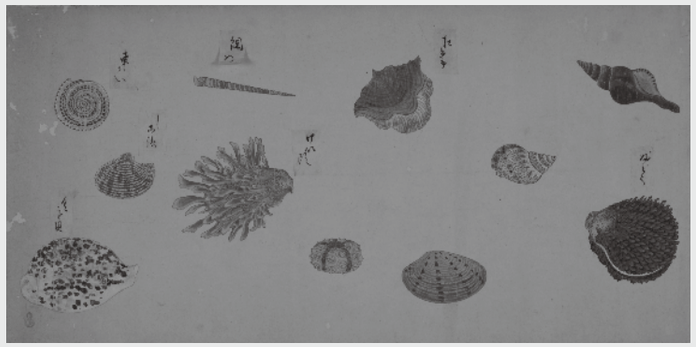
江戸の博物学ブームは、貝原益軒や稲若水といった人たちが中国の医学、薬学である本草学を、日本で普及、発展させた一七世紀後半を経て、一八世紀前半の享保の改革のころにおこなわれた物産調査がひとつのきっかけといわれている。日本内での産業が奨励され、各藩は地元でとれる生態資源、生産物を調べ上げていく。例えば、動物では、魚類、貝類、鳥類、獣類、虫類、蛇類の目録が作られることになる。その延長線上に自然の事物を記録していくという博物学的関心が高まったようである。

動植物体を標本資料として保存することがそれほどあたりまえではなかった当時の日本において、記録の中心になったのは絵画である。対象を視覚的に記録するための有効な方法だったからであろう。一八世紀半ばから盛んに描かれた「虫譜」とよばれる昆虫の図譜、中国から長崎を経由してもたらされた細密描法を駆使して描かれた「花鳥画」は、円山応挙や伊藤若冲らによる、今も我々を魅了してやまない芸術作品だけでなく、日本の動物相の実態や当時の動物観を知るうえで貴重な歴史資料となる生き物の図譜の礎となった。



鯨之図
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）





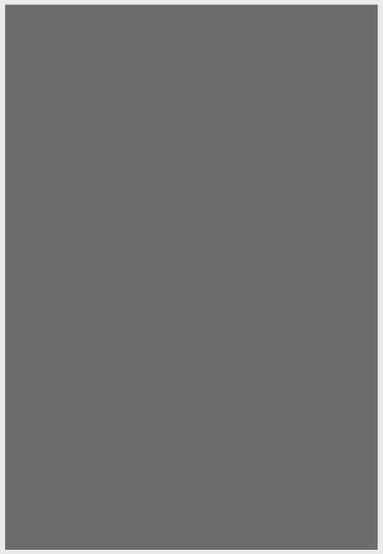
貝之図
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

シーボルトの博物学研究

こうした、日本における記述的、記載的な動物の記録のありかたと対照的であったのが、シーボルトの自然研究のアプローチである。シーボルトは形あるものに執着した。動植物の個体を買い求め、それらを研究用の標本や剥製にしたり、ときには飼育してオランダに送ったりした。これは、シーボルトの自然研究が、系統学、分類学という当時のヨーロッパにおける学問体系のなかで実践されていたことがひとつの理由であったのだろう。分類学は基本的には動植物の形態の比較研究をとおして進められる。実物標本はそうした研究のための一次資料として不可欠な存在となる。ちなみに、標本を収集し資料化するための費用は当時のオランダ領東インド総督府から日本における博物学研究費として支給されていたようである。

シーボルトが残した動物標本の収集記録は、当時の日本の動物の扱われ方を教えてくれる点でもじつに興味深い。日常的には長崎の出島での暮らしを余儀なくされたシーボルトは、一八二六年に、オランダ商館長が恒例の江戸参府をする際に医師として同行を許された。シーボルトは「稀なるくじを引き当てた」と大喜びしてこの貴重な旅に臨んだ。長崎以外の土地の自然を体験する絶好の機会だったからだ。果たして、シーボルトは普段は手にすることのできない数多くの動植物の資料を収集することができた。

帰り道の大阪では、ヤギ、カモシカ、クマ、雄シカ、サル、タヌキを生きたまま売る店があり、オオカミやヤマイヌを同じ店で買ったことがあるという記録を残していたりする。これらは「黒焼」、いわゆる滋養剤を販売する店であったと推測されているが、こうした野生動物が当時の大阪の市中で見られたことは、日本における人間と動物との関係を歴史的にとらえていくうえで大切な情報でもある。



シーボルト『日本』扉絵の原画
（フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン家蔵
Brandenstein-Zeppelin Family Archives）

さらけだされた日本の姿

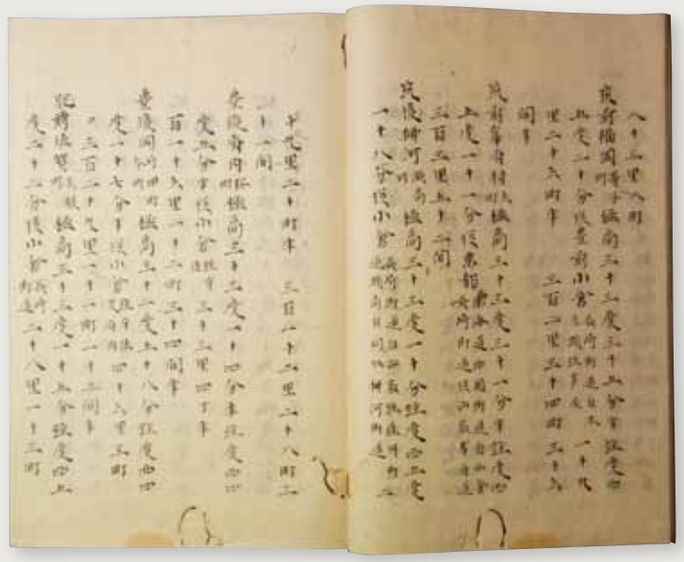
シーボルトは他の研究者と協力して後に一七年の歳月を重ねて、大著『日本動物誌』（ファウナ・ヤポニカ）を著すことになる。このためにシーボルトが懸命に収集した資料はじつに六四〇〇点あまりにおよぶ。それまで貧弱だといわれてきた日本の動物相がじつは豊富であることや先行の研究で報告されていたいくつかの動物種が実際には生息していないという指摘、新種の記載などが、シーボルト自らフィールドで確認した資料に基づいておこなわれた。日本の動物相が国際的な学界のなかで注目を集めるようになった転機ともなったのである。

動植物研究を進めるうえで、生体や標本といった実体のあるもの、実物にこだわったシーボルトは、日本に住む人びと、日本の文化をとらえるために、やはり形あるものにこだわったのかもしれない。ただし、当時のヨーロッパではいまだ人類学という学問は方法論を含めて成熟をみていなかった。そうしたなかで収集された資料から描かれた日本の「文化相」とはいったいどのようなものなのだろうか。その答えを見つけだすのも特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」の楽しみのひとつになるだろう。

※参考文献
上野益三著『日本動物学史』（八坂書房、一九八七年）
石山禎一他編『新・シーボルト研究』（八坂書房、二〇〇三年）

シーボルトが手に入れた日本の地理情報

青山宏夫（あおやま ひろお）　国立歴史民俗博物館教授



『地勢提要』に記載された北九州の諸都市（国立歴史民俗博物館蔵 H-110-5-89-1 秋岡武次郎古地図コレクションのうち『地勢提要』より。筆者撮影）

発見！シーボルト事件の日本地図

一八二八（文政一一）年、オランダ商館の医師としての仕事や日本調査の任務を終えて帰国の準備をすすめていたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、幕府天文方の高橋景保（かげやす）から手に入れた国家機密の日本地図を、国外にもち出そうとしていた。これが幕府の知るところとなって、その日本地図は没収されてしまう。現在、国立国会図書館に所蔵されている「カナ書き伊能（いのう）特別小図」は、その没収地図だとされている。だが、このときシーボルトはこれを密かに写しとり、ヨーロッパにもち帰っていた。従来の地図に比べて日本列島の形態が格段に正確になった日本地図を彼が刊行することができたのも、それによるところが大きい。しかし、これまで、シーボルトがこの日本地図を写したという確かな証拠は見つかっていなかった。

今回、国立歴史民俗博物館を中心にして実施した人間文化研究機構の共同研究で、シーボルトの末裔（まつえい）であるフォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家（ドイツ）に所蔵されているシーボルト自身の所持品のなかから、「カナ書き伊能特別小図」に関係する日本地図五点を発見することができた。なかでも、資料番号Krt-22（特別展で展示中）とKrt-26の二点は特に注目される。これらが「カナ書き伊能特別小図」の写しであることについては、特別展やその図録で実証している。詳しくはそちらに譲りたいが、ただここでは、その「カナ書き伊能特別小図」が、伊能忠敬（ただたか）によるいわゆる伊能図そのものではなく、高橋の手が加えられた編集図であることを確認しておきたい。とかく伊能図に目を奪われがちだが、シーボルトが手に入れた日本の地理情報には、高橋によって増補された情報が含まれていたのである。

緯度と経度の情報源

さて、Krt-22には、主要な都市のいくつかに地名とともに緯度と経度が記載されている。例えば、和歌山には「Wakajama 34°13′30″ 0°34′30″」とある。これは、和歌山の緯度が北緯三四度一三分三〇秒、経度が京都（西三条台改暦所）を零度としたときに西経零度三四分三〇秒であることを意味する。しかし、このような記載は、本来の伊能図にも「カナ書き伊能特別小図」にもない。

では、シーボルトはこの地理情報をどこから手に入れたのであろうか。じつは、伊能図には、これとセットになって幕府に提出された『大日本沿海実測録』という測量記録がある。これには、伊能が測量した道筋ごとに地名、里程、緯度などが収録されている。しかし、そこには経度の記載はない。ところが、高橋は、その測量記録から主要な都市を選び出し、街道ごとであるために錯綜（さくそう）していた記述を整理して、『地勢提要』（一八二四年跋（ばつ））を自らまとめていた。その際、伊能図を使って図上計測することによって、京都を零度とした経度を自ら割り出して収録していた。

いま、北九州の四都市について、Krt-22と『地勢提要』の記述を比べてみると、両者の数値は完全に一致する（表を参照）。たしかに、Krt-22には、岬や島嶼（とうしょ）などについては海上からでも計測できるために、ヨーロッパ人によって計測された緯度と経度が記載された地点もある。しかし、国内の主要な都市については、これら四都市以外でも、緯度と経度が『地勢提要』の数値と完全に一致する。つまり、シーボルトは、高橋の『地勢提要』に収録された緯度と経度を利用していたのだ。主要な都市だけが選び出され、記述が整理され、あらたに地理情報が付加されて編集された『地勢提要』は、シーボルトにとって有用だったにちがいない。

地理学者高橋景保の役割

このように、シーボルトが手に入れた日本の地理情報には、高橋が大きくかかわっていた。しかも、それは、国禁を犯してまでの行為であったとはいえ、地図を受け渡しただけの単なる仲介者にとどまるものではない。伊能図やその測量記録だけでは十分ではない地理情報を、高橋はむしろ主体的に補い、シーボルトはそれを実際に利用した。シーボルトが手に入れた日本の地理情報とは、地理学者高橋の所産でもあったのである。

Krt-22と『地勢提要』の比較

	Krt-22			『地勢提要』		
	地名	緯度	経度	地名	緯度（極高）	経度
福岡	Fukuwoka	33.35.30	5.20	福岡簀子町	三十三度三十五分半	西五度二十分
柳川	Janagawa	33.10	5.18.	柳河瀬高町	三十三度一十分	西五度一十八分
大分（府内）	Funai	33.°14　30.	4.5.30	府内桜町	三十三度一十四分半	西四度五分半
佐賀	Saga	33°15′ B	5°22′ L	佐賀呉服町	三十三度一十五分	西五度二十二分

※これら4都市の緯度と経度について、当時の計測地点の位置を考慮して現代の数値と比較すると、平均して緯度で約15秒、経度で約2分20秒の誤差がある。
距離にしてそれぞれ約450メートル、約3700メートル程度である。

佐賀／柳川

福岡

大分（府内）

Krt-22における北九州の4都市
（フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン家蔵
Brandenstein-Zeppelin Family Archives）

父と子が集めたアイヌコレクション

佐々木 史郎
国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹

シーボルト『NIPPON』「蝦夷　武器と道具」
（福岡県立図書館デジタルライブラリより）

館に収蔵されているが、その数は合わせると一〇〇点を超える。そして、一八五九（安政六）年～六二（文久二）年の第二回目の来日時にもわずかではあるがアイヌ資料を収集した。それらはドイツ、ミュンヘンの五大陸博物館（旧民族学博物館）に収蔵されている。彼の関心が江戸時代当時の日本文化にあったことは確かだが、同時代のアイヌ文化（当時の「蝦夷地」の文化）にも大きな関心をもっていた。

シーボルト、最初の収集

一回目の来日での収集は、ライデンの博物館に残されているものや彼の主著である『日本』（原著は一八三七年刊行）の記述から、かなり体系的なものだったことを知ることができる。例えば、その第七巻の一九図には、弓矢、矢筒のような狩猟用具、小刀、さじ、皿、椀などの食器、キセルとたばこ入れ、バスケット（ハマニンニクの茎をコイル状に編んだもの）や木製容器などの生活用具、捧酒箆（パスィ）や行器（シントコ）のような儀礼用具、そして樺太の五弦琴（トンコリ）のような楽器が描かれている（フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、『日本　日本とその隣国、保護国――蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球諸島――の記録集。日本とヨーロッパの文書および自己の観察による。』、一九七九年、三五五ページ）。ライデンの国立民族学博物館にはアイヌの衣類なども収蔵されている。そこから彼が生業・生活用具から宗教用具や楽器に至

ミュンヘンにある五大陸博物館の正面（2003年）

るまで包括的に収集しようとしたことがわかる。また、彼がどこまで芸術性を求めて収集したかはわからないのだが、概して工芸品としての価値が高いものが多い。このときの収集品には蝦夷地探検で有名な最上徳内からの寄贈品が含まれている（ヨーゼフ・クライナー、「ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの歴史と現状」加藤九祚・小谷凱宣編『『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』（国立民族学博物館研究報告別冊五号）、一九八七年、四二八ページ）。

シーボルト、二度目の収集

幕末の二回目の来日時にアイヌ資料を収集した経緯は不明である。一回目の来日時の収集に比べると数は少なくて補遺といった意味合いが強い。特別展で紹介されているのはこのとき収集されたもので、樺太アイヌに特徴的なイラクサ繊維の上衣、オヒョウの樹皮繊維の前掛け、ネックレス状につなぎ合わされたガラス玉数連である。また、幕末の画家早坂文嶺がアイヌの人々の姿や活動を描いた絵画三点、北海道や千島列島、サハリンが含まれた幕末に刊行された地図もアイヌ関連の資料である。そのほかアイヌと関係があると思われる資料にはかごや笠、ハマニンニク製のバスケットなどもある。これらの資料は同じときに収集された日本資料とともに、ミュンヘンの五大陸博物館に収蔵されている。

イラクサ繊維の上衣（テタラペ）
ミュンヘン五大陸博物館蔵　©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）

ハインリッヒの収集

シーボルトのアイヌ文化への関心には、日本文化の民族学的な理解のための手がかりという意味合いがあった。それをより深化させたのが次男のハインリッヒ・フォン・シーボルトだった。ハインリッヒは在日オーストリア・ハンガリー帝国公使館職員として一八六九年の初来日から一八九六年に最終的に帰国するまで、兄のアレクサンダーとともに三〇年近くにわたって、日本とヨーロッパの国々との関係強化に貢献した。それと同時に日本文化の起源に関心をもち、大森貝塚の発掘に従事したほか、北海道でアイヌ資料の収集もおこない、日本に考古学や人類学、民族学を紹介するという役割もはたした。彼が収集した資料の多くはウィーンの世界文化博物館（旧民族学博物館）に収蔵されたが、そのなかに七〇～八〇点のアイヌ資料が含まれている。

早坂文嶺「蝦夷人家族図」
ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich（MFK）